補足
『ある郷紳からエディンバラにいる彼の友人に宛てた一通の書簡』成立背景と関連事項

竹中久留美

ヒューム自身によって『人間本性論』の要旨をまとめたものが、これまでに二冊出版されている（あるいは二冊発見されている）。両者とも匿名出版であり、かつ第三者が『人間本性論』を弁護するという文体をとっている。一方は、『人間本性論摘要*AN ABSTRACT OF A BOOK lately Published; entituled, A TREATISE OF Human Nature, &c.*[1]』（1740）である。これは、1933 年にジョン・M・ケインズにより原物が発見され、ケインズとピエロ・スラッファPiero Sraffaによって復刊された。それまでは、ヒュームの書簡で言及されてはいたものの、原物自体は発見されていなかった。また、著者も特定されておらず、アダム・スミスがレポートとして書いたものとも言われていた。しかし、ケインズによって、20 世紀になってようやくヒューム本人による著作と確定されたものである。

そして、ヒューム自身により『人間本性論』の要旨をまとめた二冊のうちの残るもう一方が、『ある郷紳からエディンバラにいる彼の友人に宛てた一通の書簡 *A LETTER FROM A GENTLEMAN TO His Friend in Edinburgh*[2]』（1745）、通称『エディンバラ書簡』（以下、『エディンバラ書簡』と呼ぶ）である。これは、1966 年 12 月にスコットランド国立図書館によってバーミンガムにある書籍販売業者から発見された。その出所は、不可解な点は残るようだが、ベルファスト近郊のリスバーンのジョンストン－スミスJohnston-Smith氏の書庫にたどることができ、タイプと装飾という証拠から、エディンバラのT. Lumisden and J. Robertsonによる印刷のパンフレットであると推定されている[3]。これも、ヘンリー・ホームHenry Homeに宛てたヒュームの 1745 年 6 月 13-15 日付書簡[4]での『エディンバラ書簡』の出版に関する記述と、またアーネスト・C・モスナーによってその存在の指摘はあったものの[5]、『摘要』と同様、その発見までそのパンフレットが存在していたということ以外は知られていなかった。

摘要のような形式の『エディンバラ書簡』は、不公正な告発に対するヒュームの哲学的原理についてのヒューム自身による弁護となっている。『人間本性論摘要』も『エディンバラ書簡』も匿名出版で第三者が書いている形式をとっているが、どちらも明らかにヒュームの思想と文体の特徴を帯びているとされる[6]。ただし、『エディンバラ書簡』は、語調においては『人間本性論摘要』より個人的ではある[7]。

この書簡の最後で、『人間本性論』の性急な出版を悔やんでいる一節がある。「著者はもっと遅らせればよかった。その原理が危険だからではなく、不完全さをさらに訂正見直ししてより成熟したものにできたに違いないから」とヒュームは言っている。この悔いは生涯引きずり、ヒュームの死の約 4 か月前に書かれた『わが人生*My Own Life*』でも『人間本性論』は「印刷機からの死産*dead-born from the press*」と感じ、議論の内容より文体のせいで、あまりに早く出版したためだとしている[8]。

現存するケインズとスラッファによって1938年に（そして1965年にオフセット印刷で再度）復刻された『人間本性論摘要』は基本的な哲学的構想を概略するためのよく推敲された成果である一方、反対に『エディンバラ書簡』は、「ある朝に作られたwas composed in one Morning」ものである。おおよそ7500語のこの書簡は、前半は『実例と告発』のそのままの引用であり、ヒューム自身は後半のみ構成したのであるから、確かにかなり素早いのではあるけれども、「ある朝」だけでも書き上げることが可能だと推測されている[9]。

『エディンバラ書簡』は、エディンバラ市長であったジョン・クーツJohn Couttsに宛てられたものである。クーツはヒュームの友人であった。医師として従軍するために、ジョン・プリングルJohn Pringleがエディンバラ大学の倫理学兼精神哲学教授職を辞任することに伴う後任の選出選挙に際し、クーツはヒュームを候補者として推薦した。ヒュームは、それについてクーツから伝えられ受諾していた。また、念願のアカデミックキャリアに就けることに関して楽観視していた。それはヒュームの友人であるウィリアム・ミュアWilliam Mure of Caldwell[10]への1744年8月4日付書簡[11]からも明らかである。

しかし、ヒュームの教授職就任に対して大きな反対論が起こり、当初は賛成派であったハチスンすらも反対するなど、ヒュームにとっては思わしくない形勢となった。その反対派の主たる理由が、ヒュームは『人間本性論』において無神論を説いたとみなされるというものであった。その反対運動の中で書かれたのが、その時のエディンバラ大学学長ウィリアム・ウィシャートWilliam Wishart[12]が書いたとされる[13]『実例と告発*the Specimen and Charge*』である。これは、『人間本性論』を抜粋した上で、ヒュームが六つの哲学的罪業を犯していると告発するもの（the Sum of the Charge）である。

その六つの哲学的罪業とは次のものである。

1. 普遍的懐疑論。
2. 原因と結果の教義を否定することによって、完全な無神論へと導く原理。
3. 神の存在と実在に関する誤謬。
4. 神が第一原因であり、宇宙の原動力であることに関する誤謬。
5. 魂の非物質性を否定し、この否定から生じる帰結について、彼は責められるべきである。
6. 正誤、善悪、正義不正義の間の自然で本質的な差異を否定することによって、道徳性の基礎をむしばむことについて、つまり、差異を単なる人為的なものにし、そして人間の申し合わせと契約から生じるとすることについて、彼は責められるべきである。

これらに反論するべく書かれたのが『エディンバラ書簡』である。この書簡がヘンリー・ホームの手元にも届き、エディンバラ大学教授職へのヒュームの就任予定に対して生じている反論に対抗するために、「最後の熱心な努力[14]」としてヘンリー・ホームHenry Home, Lord Kamesはこの書簡を急いで出版した。『エディンバラ書簡』の日付が1745年5月8日で、これが出版されたのが21日である[15]。わずか2週間弱の間に、ヒュームのエディンバラ市長宛て書簡が、何らかの形でヘンリー・ホームにも届き出版までされたのであるから、大変な「熱心」さである。しかし、その「熱心」さもすべて無駄に終わってしまう。またさらに、この努力が無駄に終わったことだけでなく、結果的に、『エディンバラ書簡』において、『人間本性論』で述べたような宗教的懐疑論を抑えて、彼の「常識」と「正統な」態度を強調し、『人間本性論』ではおろそかにした名前の名づけと著書（ヒューム）の過去と現在の文脈での位置づけを述べたことが無視されることになった[16]。

ヒュームの『エディンバラ書簡』での反論は、まずウィシャートの『実例と告発』における『人間本性論』からの引用が「傷つけられた抜粋集 *maim'd Excerpts*」（斜体原文）であるとして、この『実例と告発』を全文そのまま引用することから始めている。その上で、帰せられた六つの哲学的罪業について反論している。

ヒュームによる反論をそれぞれ要約すると以下の通りである。

1. 疑いによって、単なる人間的論考者の自尊心を抑止することだけである。我々の本性的諸能力の諸作用に関しては謙遜と謙譲が懐疑論の結果である。
2. 道徳的確実性は数学的確実性と同程度に明証的である。また感官による明証性はもっとも説得的である。あらゆる存在者が原因を持つということは道徳的明証性によって支持される。太陽は明日のぼるのような命題と同じである。これを否定しても、無神論が帰結されない。
3. バークリのように、われわれは正確に言ってなんらの抽象観念ないし一般観念を持たないということ、また一般と呼ばれている諸観念は、一般名辞に付加された特殊観念に他ならないということを主張した。我々が神の存在を主張するとき、存在の一般的抽象的観念を形成し、それを神の観念と結び付け、またこの抽象観念が結合によって一複合概念を形成できるというのではない。これこそ存在に関するあらゆる命題についての事態である。
4. デカルトやマルブランシュは機械原因論の立場にあったが、この見解はイギリスでは支持されなかった。神の直接的意思作用ではなく、一種のエーテル流動体の仮説を引力の原因として持ち出すことにより、機械原因論が否認される。その意味で、神が宇宙の第一原因であり、原初的作動者であるということを否認していない。
5. いかなる箇所でも魂の非物質性を否認していない。この問題はなんらの判明な意味を受け入れない、つまりわれわれは実体に関してなんらの判明な観念も持たないということ。
6. 道徳的諸命題は、理性のもっぱらの諸対象と同一性質であるという主張を否定しているのである。自然的美徳によって共感、寛大を意味し、また自然的本能によってわれわれが直接導かれていくような諸美徳を意味している。そして、人為的美徳によって正義、忠誠を意味し、自然的本能と並んで人間社会の一般的諸利益と他の諸利益との結合に対する一種の反省を要求するような諸美徳を意味している。その意味で、言語は人為的行為である。人々が社会に無関係なものとして契約を守る責務を負っていないということではなく、社会と無関係では人々は契約を結ぶことはなかったであろうし、契約の意味さえ理解しなかったであろうということである。

最後の告発は、『人間本性論』第三巻「道徳について Of Morals」に基づいており、それよりも 8 ヶ月早い 1740 年 3 月に出版された『人間本性論摘要』が当然扱えなかったもののひとつである。

斎藤によれば、『人間本性論』は「認識論に関する著作」であり、かつこの『エディンバラ書簡』を書く契機となったウィシャートによる『実例と告発』が「この著作（『人間本性論』）の内容が宗教ならびに道徳に関する原理に関して、主として攻撃を受けたことを注目すべき」（丸括弧内筆者）であるとし、そして「認識論即道徳論、宗教論であった事実を見落とすと本書の正しい評価は不可能である」とする [17]。上述のヒュームの反論を見る限り、確かにこの見解は説得力のないものではない。そして、これに従うならば、この『エディンバラ書簡』は、『人間本性論』を解釈する上で、きわめて重要な一次文献であるとしで取り扱うことができよう。

モスナーも言うように、ヒュームにとってその直接の目的（すなわちエディンバラ大学教授職選に際してのヒューム反対派に対する自分自身による弁護）を果たし損ねたこととはいえ、それを後の時代にとっても不要なものとする必要はないであろうし、それどころか私たちは、ヒュームがみなされたかったようにヒュームをみなし始めることができると言える。

結局、その時の教授選では、ヒュームより 7 歳年下のウィリアム・クレゴーンWilliam Cleghorn[18]が選出された。ヒュームの友人で 1764-85 年に教授となったアダム・ファーガソンAdam Fergusonも、「ハイランドの遊山旅行での対話Dialogue on a Highland Jaunt」にヒュームとともに参加したクレゴーンに賛成を、ヒュームに反対を表明した [19]。また当初は賛成していたフランシス・ハチスンも、最終的に反対に回った。

ヒュームは、『人間本性論』に由来する無神論というレッテルから逃れられず、生涯大学教授職が得られなかった。しかし、モスナーによれば、ウィシャートによる告発に対するヒュームの応答は価値のあるものである [20]。確かに、この『エディンバラ書簡』を書いていたとき、ヒュームは手元に『人間本性論』を持たずに記憶に頼って反論をしたことは、この書簡の中にも書かれている。確かに、『人間本性論摘要』を書いたときよりも、むしろ『エディンバラ書簡』を書いた時の方が論理的に考えなければならず、それゆえに、懐疑論、因果論、道徳性についてのヒュームの見解が、それらが簡潔であると同時に明晰で率直な説明で新たに述べられているとみなすことができるのである [21]。

この『エディンバラ書簡』は、現在出版物となっているものの代表的なもので、この書簡単独ではE.C.モスナーとJ.V.プライスの共編版（Edinburgh University Press, 1967, 以下モスナー版）、『人間本性論』の付録としてD.F.ノートンとM.ノートンの共編版（Oxford University Press, 2007, 以下ノートン版）、『人間知性研究』の付録としてS.バックルStephen Buckle編版（Cambridge University Press, 2007, 以下バックル版）とある。モスナー版のみファクシミリ版で、他二つは活字版である。ノートン版は、ノートン編の巻末に付せられていることからであろう本文中に記載されたウィシャートによるであろう『人間本性論』のページ数がノートン編のものに合わされており、バックル版は本文中ページ数が一切削除されていたり、大文字の語頭が小文字になっていたりするなど、編者により本文に多少の手が入ってしまっている。また、インターネット上にもエディンバラ書簡のテキストがいくつかのサイトで上がっている。信頼性の高いのはhttp://www.davidhume.org/texts/lg.html[22]である。これ以外にもいくつかあるが、それらはスペルミスがあるなどする。そのため、一次文献として扱うには不適当かもしれない。テキストを重要視するならば、ファクシミリ版であるモスナー版、あるいはdavidhume.org版が適当であろう。テキストが書簡なので原注はないが、モスナー版には編者注がある。といっても、書簡内に表記された哲学者の紹介にとどまる。日本語翻訳版は、『奇蹟論・迷信論・自殺論』（福鎌忠恕／斎藤繁雄訳, 法政大学出版局, 1985）に掲載されている。特に訳注に関しては、上に挙げたものよりは充実している。

文献表

David Hume.（1967）*A Letter from a Gentleman to His Friend in Edinburgh*, ed. Ernest C. Mossner & John V. Price, Edinburgh University Press

David Hume.（2011）*The Letters of David Hume*: Volume 1, ed. J. Y. T. Greig, Oxford University Press

David Hume.（2011）*New Letters of David Hume*, ed. Raymond Klibansky & Ernest C. Mossner, Oxford University Press

Ernest C. Mossner.（1967）Introduction, *A Letter from a Gentleman to His Friend in Edinburgh*, ed. Ernest C. Mossner & John V. Price, Edinburgh University Press

Ernest C. Mossner.（1980）*The Life of David Hume*, Oxford University Press

David Fate Norton.（1968）Hume's A Letter from a Gentleman, A Review Note, *Journal of the History of Philosophy* 6 (2): p.161-167

Paul Russell.（1997）Wishart, Baxter and Hume's Letter from a Gentleman, *Hume Studies* Volume XXIII, Number 2, p.245-276

斎藤繁雄.（1985）解説, デイヴィッド・ヒューム, 奇蹟論・迷信論・自殺論―ヒューム宗教論集Ⅲ, 法政大学出版局

註

[1] 正式なタイトルは、"*AN ABSTRACT OF A BOOK lately Published; entituled, A TREATISE OF Human Nature, &c. wherein The CHIEF ARGUMENT of that BOOK is farther illustrated and explained*."である。

[2] 正式なタイトルは、"*A LETTER FROM A GENTLEMAN TO His Friend in Edinburgh: containing Some OBSERVATIONS on A Specimen of the Principles concerning Religion and Morality, said to be maintain'd in a Book lately pu- blish'd, intituled, A Treatise of Human Nature, &c*."である。

[3] Mossner, 1967, xxv

[4] Hume, ed. Klibansky & Mossner, 2011, p.14-18

[5] モスナーは『ヒューム新書簡集 *New Letters of David Hume*』編者序論と『ヒュームの生涯 *THE LIFE of DAVID HUME*』初版において指摘していた。cf. Mossner, 1954, xiv

[6] Mossner, 1967, xxii

[7] Mossner, 1967, xxiii

[8] My Own Life. 現在では様々な版が出版されている。例えば Hume, ed. Greig, 2011

[9] Mossner, 1967, xxiii

[10] のちにグラスゴー大学の学長（1764–5）となる。

[11] Hume, ed. Greig, 2011(1), p.55-59

[12] ウィシャートは町議会議員でもあったが、それに選ばれて（1736 年 11 月 10 日）から就任までに 1 年（1737 年 11 月 9 日）かかっている。それはウィシャート自身も彼の著書に関してエディンバラ長老会によって告発されたためである。Mossner, 1967, xv

＊スコットランドでは、1530 年代以降、ローマ・カトリック教徒がフランスとの結束を強める一方、カルヴァンの教えに立つプロテスタントは、イングランドとの友好関係を重視し、両者の対立が激化する。ジェイムズ 5 世の妃で、王の死後政治の実権を握ったギーズのメアリが、1559 年にプロテスタントを迫害すると、彼らはメアリを筆頭とするローマ・カトリック教徒とフランスに戦いを挑んだ。この改革戦争を率いたのがジュネーヴ帰りの長老派 J.ノックスであり、改革を誓い合った「会衆」と通称される俗人プロテスタント信徒が彼を支えた。この戦争にイングランドが介入した結果、「会衆」が宗教的主導権を握り、議会は 1560 年に教皇の権威を否定して、カルヴァンの教説を基本にした信仰告白が制定された。だが、その後、教会統治や礼拝様式を巡って、ノックスの流れを汲む長老派と、イングランド教会の影響下にある主教派とが対立するようになる。1630 年代にイングランド教会の礼

拝様式などをチャールズ 1 世が強制すると、この対立は主教戦争と呼ばれるイングランド対スコットランドとの戦いに発展した。スコットランドに長老派教会が定着するのは 17 世紀末のことである。（『イギリス哲学・思想辞典』「宗教改革」抜粋）

[13] P.ラッセルはこの著者として Andrew Baxter を挙げている。

[14] Norton, 1968, p.161-162

[15] 出版を急いだせいか扉のページに誤植がある。“printed”が“pinted”になっている。cf. Hume, 1967, cover

[16] Mossner, 1980, p.160-161. 特に後者については、近代ではデカルト、**ヒューエット**、マルブランシュ、バークリ、**クラーク**、**カドワース**、ハチスン、ロック、**ニュートン**、**ティロットソン**、ウォラストンを含んでおり、太字の人たちは『人間本性論』でも『人間本性論摘要』でも言及されてもいない。

[17] 斎藤, 1985, p.163

[18] しかし、クレゴーンは 35 歳での早世によって何も出版しなかった。cf. Mossner, 1967, xxi

[19] Mossner, 1967, xxi

[20] Mossner, 1967, xxiv

[21] Mossner, 1967, xxiv

[22] 現代のヒューム研究者でもっとも著名なうちの一人であるピーター・ミリカンがこのサイトの運営に携わっており、その他のテキスト自体を参照する上では、インターネット上では最も適したサイトであると言える。